

共慣義塾の研究

——東京検梅史の補遺として——

中西 淳朗¹⁾, 樋口 輝雄²⁾

¹⁾神奈川県横浜市, ²⁾日本歯科大学新潟生命歯学部

受付:平成21年4月30日/受理:平成21年7月31日

要旨:東京市域における公娼の検梅・駆梅事業は、明治5年2月頃より意外にも業者の意にそって随意的に吉原遊廓ではじめられた。それは明治9年の「娼妓黴毒検査規則」により強制化されたが、この間における遊廓内の変化については、ほとんど研究されていない。そこで我々は、法令や公文書にとらわれず、風俗、街の事件、衛生等の諸資料からも探求した。調査の結果、明治4年5月から4年半の間、3回の吉原大火に罹災した遊廓は経営的に行きづまり、検梅事業は衛生警察の強化をめざす「官」により包みこまれたと推測する。また共慣義塾に在籍した一部の医師は、吉原検梅事業のごく初期に主体的存在を示しただけで、塾内では系統的な医学教育は行わなかった。

キーワード:共慣義塾, 吉原遊廓, 東京検梅史, 衛生警察, 吉原大火

はじめに

平成17年、著者のひとり中西淳朗は『日本医事新報』に「共慣義塾の研究序説」上下2編を発表¹⁾、明治5年2月に英学塾の医生が新吉原遊廓において随意的な検梅を実施し、水銀剤の皮下注射による治療を行ったという中野操論文²⁾を紹介し、この英学塾が医学を教えた可能性については今後の課題と述べた。そこで中西はこれの解明のために次の計画をたてた。

1. 盛岡藩士の神原精二は、後に共慣義塾の「校主」となるが、どのような人物であるのか。
2. 義塾に出入りした人物の中から、神原伊三郎、池田元岱と玄泰を取り上げ研究する。
3. 東京検梅史上における明治4年後の急展開と「民」から「官」への進展について考察する。
4. 医生松井恕助の自筆履歴書と、大阪朝日新聞記事に検討を加える。

しかし、中西が健康を害したので、樋口輝雄が共同研究者に加わり、新しく関連資料を収集しなおして研究を一歩進めることができたので、茲に

略述することとした。

その1. 神原精二という人物

共慣義塾は明治維新の後、南部利恭としゆき(盛岡藩最後の藩主)が、藩士子弟の中から傑出した人物を世に送り藩勢を立てなおそうと創立した英学塾であった³⁾。これの開塾願書は、明治4年12月に南部信民(七戸分家の隠居)の名をもって提出されている。しかし、明治9年5月に義塾が京橋・木挽町から湯島・三組町に移転した際の開学願は、東京府士族・神原精二となっており、明治16年9月の廃校届は、校主・神原精二で、但書として“旅行ニ付代理・神原伊三郎”となっている。

これでは旧藩主南部一族と神原精二がどのような関係にあるのか、全く知ることができない。そこでこの人物を『明治過去帳』で探ってみることにした⁴⁾。そこには“神原護国 備後沼隈郡の産にして、諱は精二、文政元年生れ、明治十八年一月六日没す。年六十八(明治碑文集)”と僅かに3行記載されているのみである。ところが2006年(平成18)2月、共同研究者の樋口が、思いもか

けぬ資料を探し出してきた。

それは1989年に朝日新聞社が発行した『大正新興美術の息吹・アクション展図録』であった。その中に「神原泰，生い立ちと大正期新興美術運動を語る一聞き手，浅野徹，^{おむか}五十殿利治」という対談記事が掲載されていた。P・R・ピカソの研究家として名高い神原泰は，まず祖父の精二のことから語りはじめている。

“祖父精二(1818-85)は仏教，教典の学者として著名な人で，備後国沼隈の生まれ，1855(安政2)年に芝増上寺の学寮長となった。維新後の1870(明治3)年に僧籍を脱して神原姓を名乗り，南部(盛岡)藩の財政の整理に手腕を発揮したほか，湯島に共慣義塾を設立し，原敬，犬養毅などの英才を育てている。”

実に手短かに要領よく神原精二のことを語っているが，余りにも手短かで盛岡藩との初めての接点が見出しにくい。その後，樋口が「神原精二居士の生涯」という論説を『仏教論叢』という雑誌の中に見出した⁵⁾。この論説は，精二の生涯に関するアウトラインを述べたとしつつも，重要な記事を含んでいる。特に幕末期の次の活動に注目したい。

イ) 福山の安楽寺で得度し，江戸の三縁山増上寺並びに京都の華頂山大谷寺知恩教院(浄土宗大本山，門跡伏見宮博教親王)で学ぶこと6ヶ年といい，加えて東叡山寛永寺(天台宗，門主は輪王寺宮法親王)で円満頓足の天台成仏の教を学ぶ。

ロ) 芝増上寺の学寮長(主)となり，文久2年には大衆の上座(大寺院の僧侶全体の寺務を統率する役僧)にすすみ，大名と同席がゆるされる地位をえた。

ハ) 幕末に至り国事に奔走した。孝明天皇の主張する「佐幕攘夷」の派に組みし，勤皇僧として公武合体をめざして策動した。維新戦争時には奥羽越列藩同盟の黒幕ともいわれ，上野の山を拠点として徳川慶喜(姉が南部利恭の母)を将として一戦を策したが失敗し，後に捕えられて長州送りとなる。

1870年(明治3)，慶喜赦免に伴ないゆるされて出獄。直ちに還俗したところ，盛岡藩より士族

として迎えられた。大名でも同等に話せる地位にいたこと，学僧として高名であったこと，宮門跡の利点をよく知っていること，松平容保の如く佐幕勤皇に徹した人物であったことの諸点が，盛岡藩内で高く評価され，士族として迎えられたのであろう。

柳田泉著の『福地桜痴』によれば⁶⁾，湯島三組町の福地源一郎の英学塾は，放漫経営により破綻し，榊原某という経営の才ある男に塾を譲ったとある。そして盛岡藩がこれを引受け共慣義塾と名を改めて開塾したとしている。しかし榊原某に該当する人物は見当らず，柳田泉は神原精二を誤って榊原某と判じたものと私どもは考えている。

明治3年春ごろ，南部家再興の一手段として，当主の南部利恭の妹・郁子を知恩院宮尊秀法親王(伏見宮家出身の門跡，日光の輪王寺宮公現法親王の弟。明治元年勅命で還俗し，議定，会計事務総裁となる。後の華頂宮博経)の下に興入れせしめようとする案が元盛岡藩でわき上った。前出の「神原精二居士の生涯」を書いた吉田光覚によれば，発案者は不明であるという。案があっても媒酌の地ならしができない人物がいない。そこへ勤皇僧と認められ釈放された神原精二が出仕してきた。神原は南部家の借財整理と共に，この婚姻案に大いに努力し明治7年5月に成婚にこぎつけたのであった⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。

1959年刊の『東京の英学』¹²⁾で，執筆者の手塚龍磨は“慶応義塾を出てから共慣義塾で教えた門野幾之進の「事績文集」に出ているが，共慣義塾は，はじめ福地源一郎が設立して，のちに南部家の所有となったと説明されている。(また)共慣義塾は湯島に移ってから増上寺の僧侶であった神原精二が還俗して経営していたと(門野は)云っている。(しかし)真疑のほどにもわかに決しがたい。”と述べている。〔註：カッコ内は著者ら挿入〕

今回，著者らの研究でも直接証拠は入手できなかったが，義塾の設立者に記憶ちがいが部分的にあるにしても，福地英学塾(日新舎)の買取りでは，地所は借地としたため¹²⁾ 差程むつかしい話にならず，浄土宗大本山知恩教院と神原精二並び

に南部家の三者のその後の結びつきを考えるならば、南部家によって士族に取立てられた神原精二が共慣義塾の運営を明治9年以降一任されていたとみるのが最も妥当であろうと考える。

その2. 塾に出入りした人物

塾生が200名を越すと云われた共慣義塾である。いろいろな人物が出入りした。塾生としては、原敬、新渡戸稲造、犬養毅らの名があげられる。教員としては明治9年に門野幾之進、岩田蕃、八角高英、森武三郎らの新進の英学者をそろえている。また旧盛岡藩関係者、なかんずく八角高遠（高英の父、京都の順正書院塾頭補導で松山棟庵の兄弟子、藩奥医師をへて洋学校日新堂総督となり、種痘普及につとめた）は維新後、盛岡県医術検査局長となり、退官後上京。明治8年5月から南部家家従を勤めていた¹³⁾から、学校経営や医学教育についての意見などを来塾して述べたものと推考できる。茲では初期から塾の経営にかかわったと考えられる神原伊三郎、医学補導であったと思われる池田元岱を取り上げ研究した。

神原伊三郎；塾の「校主」神原精二が、廃仏毀釈の後の仏教運動などで留守した折に代理をつとめた人物で、1858年（安政5）、薩摩藩のお抱え狩野派絵師・大山探賢の次男として生れた。幼少期に乾繁子の養子となったが、繁子は伊三郎をつれて神原精二に嫁いだ。よって神原姓となり長じて慶応義塾に学び、中退して東京工部大学校に入った。1882年（明治15）に卒業して大蔵省に入省。そのころ養父精二は、福島県岩代の安積平野の開墾事業を始めるに当り指導者に伊三郎の名を書類に記しているという。伊三郎は大蔵省に入って2年後、公家の娘正親町夫見子と結婚したが、養父精二は翌18年1月に死去している¹⁴⁾。

伊三郎の名で共慣義塾が廃校したのは明治16年9月25日である。その届出書では所在地は「本郷区駒込西片町拾番地」となっている。しかし、この義塾の木挽町転出後の本拠地は「湯島三組町百五番地」であった筈であるが、こちらの土地については何も記載はない。南部家や神原一族に

とって、駒込西片町の方は出張所扱いであったのだが、表1に示すごとく明治11年10月以降に西片町10番地を本事務所としていることがわかった。それは「英学私塾関係外人教師名一覧」¹⁵⁾によると、かつての共慣義塾の開設者であった南部信民は、明治8年7月に小石川原町35番地で米人ライスを雇傭しており、神原精二は三組町105番地で同9年10月に英人ヘインを、10年8、9月に英人J・グーディングとC・グーディングを、そして西片町9番地の方で、同11年10月に英人ジョセフ・ヘアを雇入れている。つまりこの時期には共慣義塾経営は南部家からはなれ、旧南部七戸藩の人々は信民の名をたて小さな塾を別におこしたものと推考されるのである。その理由は明治9年5月13日付の神原精二届出の開学願が、実質は名義人の変更届であったことによる。

そもそも明治初期の私塾は全寮制が多かった。新渡戸稲造は倹約のため、芝桜川町（現・虎ノ門1丁目）の叔父の家から湯島へ通学したのは例外であったとみられる。初期の湯島三組町の塾には常に教員や生徒が多数住みこんでいた。「校主」の死亡した半年後に当る明治18年7月出版の『東京流行細見記』をみると¹⁶⁾、「英学屋」の部に、福沢（諭吉、慶応）、中村（敬宇、同人社）、近藤（真琴、攻玉社）に並んで神原があがっている。共慣の評判の余韻が残っていたとみるべきか、或はある期間、寮生の区切りがつくまで湯島三組町で教授し続けていたとみるべきか、いまは判断を下せない。

池田元岱^{びんたい}；長崎生れの医師で、この人と共慣義塾との関係についての情報源は中野操の著わした「我邦に於ける皮下注射特に水銀皮下注射の濫觴に就て」である¹⁷⁾。即ち、“池田元岱、目澤融徳という二医師が開いていた共慣義塾の本校は駒込にあり、明治五年に新吉原遊廓の中に出張所を設けて、医生養成の傍ら娼妓の梅毒治療に当たっていた”と述べ、報道紙として「新聞雑誌」第32号（明治5年2月発行）をあげ、共慣義塾の詳細は知らないとしている。

共慣義塾は著者らによって、旧盛岡藩々士のために造られた英学私塾で、表1に示した如く、明

表1 共慣義塾の変遷と新吉原関連事項

年月日	事項
明治元. 4. 8	横浜吉原で検梅を制度として発足せしめた(英医ニュートンの梅毒検査所できる)
4. 4.20	東京府が府立の梅毒病院の建設決める
4. 8. 1	英医ニュートン著『徴療新法』発刊される
4. 9. -	小菅県千住にて検梅, 駆梅はじまる(大久保適齋担当, 1年後中止) 京橋新富町の新島原遊廓廃止される
4.10. ?	東京府, 新吉原遊廓へ検梅申入れ, 拒否される
4.11.12	福地桜痴, 岩倉使節団に加わり欧米に出発
4.12. -	京橋木挽町に共慣義塾事務所設立(開設者, 南部信民)
5. 1. -	京橋新富町に共慣義塾々舎できる(遊廓の跡地か?) 3ヶ月後火災にあう
5. 2. -	池田元岱ら, 新吉原廓内に共慣義塾の出張所を作り, 随意的検梅はじめる
5. 6. -	本郷湯島三組町の福地塾・日新塾を買取り共慣義塾が移転(開設者, 南部信民)
6. 9.13	岩倉使節団の福地桜痴帰国
8. 夏	南部信民, 小石川原町に英学塾を開く(旧七戸藩用か)
9. 5.13	湯島三組町の共慣義塾の開学願人が神原精二にかわる. 3月に松井恕助が入塾し医学を学ぶ
11.10. -	駒込西片町10番地に義塾の出張所を開き, 後に本事務所とする(届出人, 神原精二)
13. 1.29	大阪朝日新聞が松井恕助の新駆梅法, 大成功と伝えた(於尾道・駆梅院)
16. 9.25	共慣義塾廃止を届出る(届出人「校主」神原精二代理人神原伊三郎)
42. 2.16	富士川遊の四男英郎, 駒込西片町9番地に生れる

治4年京橋木挽町に創立され, その後湯島三組町に移転, 同11年10月駒込西片町に出張所を開いたことが解った. 上の中野の理解は正しくない. この義塾は英語を中心に教えた三組町の塾が本校であり, 駒込西片町に分塾(出張所)を作り, 医学を学ぶグループを作り, そのリーダーが池田元岱であろうと考えている.

新吉原遊廓では検梅事業をどのように受けとめていたかを, 近年入手した『新吉原遊廓略史』でみてみよう¹⁸⁾.

“新吉原では明治5年2月頃, 廓内に在った共慣義塾に池田元岱, 目澤融徳の両医が出張所を設け, 梅毒の治療に従事したことがあったが, 全娼妓に対し検梅を施行するに至ったのは, 明治6年12月発布の娼妓規則第6条によるもので, (中略)最初の検梅は明治7年6月6日に施行された.”とある.

この記述文の情報源は, 中野操と同様, 「新聞雑誌」第32号であるが, 軽視されている点があるのであえて取上げて論及しておく.

イ) 上記の文章は, 強制的検梅までの経緯を語っている. そもそも検査抜き駆梅は考えられないから, 池田らの駆梅治療には当然検査するこ

と, 即ち当時の言葉でいう「陰門開観」が前提にならなければならない¹⁹⁾.

ロ) 「新聞雑誌」第32号には, “去年, 東京府庁より療梅院の取立ての沙汰ありしが, 遊女は勿論, 娼楼茶店の主人共一同不承知”であった. 即ち府の下話の段階で長崎の丸山遊廓同様, 廓をあげて「陰門開観」には反対で交渉は立ち消えるかにみえた.

ハ) “池田, 目澤両医は旧廓中に入出し, 人望を得たるを以て此挙漸く行われたり”とある.

池田, 目澤両先生ならば人柄がよいからと, 簡単に決まるであろうか. 交渉にかなりの日数を要したろうが強力な仲介人が存在しなければ進展しない. 当時の新吉原で最も顔の売れた男は福地源一郎である. 源一郎(桜痴)の父は苟庵こうあんと云って長崎の丸山下で開業していた大医である. 姉は丸山遊廓で遊女屋を開いていたという説がある²⁰⁾. 源一郎からみれば医師と遊廓との仲介なぞ手数はかからない. とにかく俺が推挙する人物だからということで, 治療を希望する遊女に検梅を施行したものと読めるのである.

池田元岱は, 故郷の長崎にいた頃, 福地苟庵の弟子であったかも知れない. たとえ, そうでなく

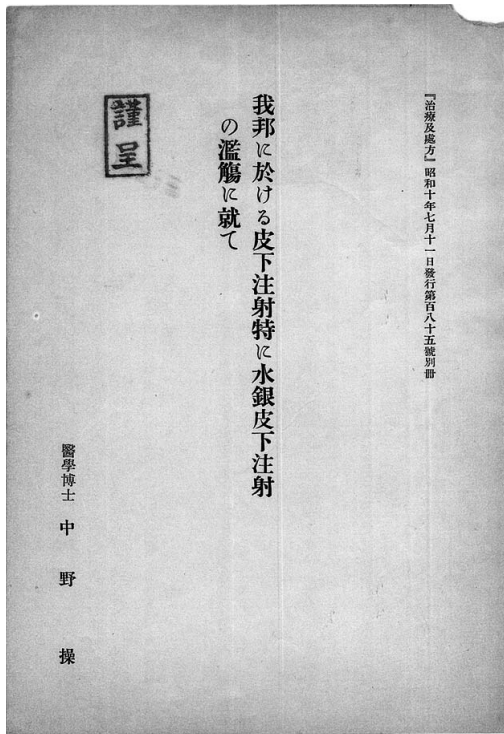


写真1 研究の発端となった中野操論文（中西所蔵）

とも、長崎のオロシヤ女郎衆の検梅制度について、多少の知識をもっていたと思われる。池田は「陰門開観」にもとづく診療技術をどこで身につけたのであろうかという疑問がわいてくる。この問題に入る前に、幕末期の長崎での検梅についてふれておきたい。

1860年（万延元）12月、佐藤舜海と共に長崎医術伝習所へ留学した関寛齋は、同月23日から「長崎在学日記」を書きはじめている²¹⁾。読みやすい様に改め、抜粋略記する。

“臘月23日、曇、入塾。

24日、神代氏、藤田氏へ煙火入他ヲ進ス。器械ヲ求ム。

25日、26日（略）

27日、曇、午前読書。午後、長崎製鉄所々長ノ蘭人「ハルデス」ノ案内ニテ製鉄所内ヲ見学。後、「ロシア」ノ妓楼ヲ観ス。卑屋不潔甚シ。洋人マタラース（船員）ノ遊所ナリト。”

留学5日目に早々と蘭人につれられて、設立4

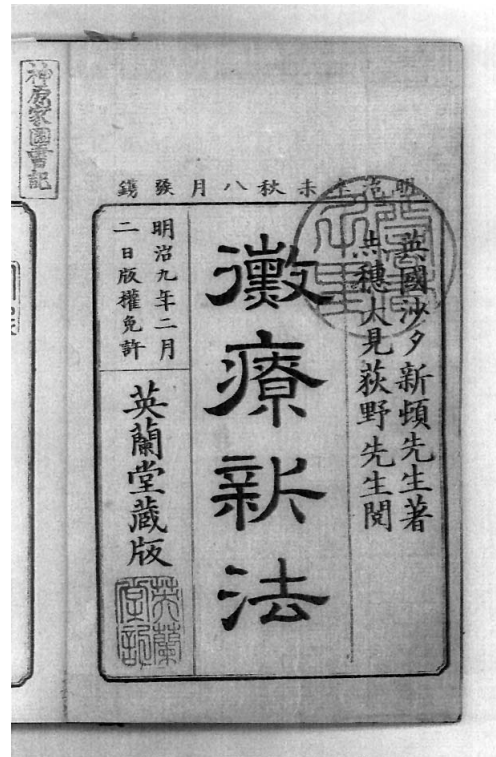


写真2 ニュートン著の癒療新法（中西所蔵本）

別註：研究当初は左上の「神原家図書記」印にふりまわされた。樋口の探索により、香川県の神原甚造氏の旧蔵本と判明した。

ヶ月目のロシア船員、水兵のための遊女屋の内部を見学したのである。この遊女屋は松本良順の発案で建てられたもので、彼は長屋と呼び、飲食ぬきの遊所と述べている。かた物の関寛齋には珍らしき出来事であった。では、そこは一体どこか。

1981年、著者のひとり中西は、長崎大学中西啓兄の案内で、上記の場所を訪問した。彼の著書『長崎外科史』より引用する²²⁾。

“稲佐遊廓（弁天町13アサヒ・ストアー稲佐店）ロシア人たちのために建てられたものという。幕末期からある。稲佐の遊女は、長崎（丸山）の遊女よりも格が低いとされているが、1860年、遊女の検梅をポンベがはじめて松本良順にさせた²³⁾。当時の検診台は1945年の原爆による焼失まで稲佐にあった。”

かかる次第で戦後は風景が一変した。良順のいう長屋はコンクリートの建物に化け、そこにおさ

まったストアーがあるのみであった。平成に入ってジョイフルサン・ストアーに代る。

このコンビニの所在地については、ほとんど知られていないので蛇足ながらつけ加えた訳である。蛇足ついでに啓兄が書かなかった2点にふれておく。1) 稲佐の遊女には被差別部落出身者が多かったこと。2) 松本良順は検梅を2日ほどしかせず、あとは弟子にまかせたこと²⁴⁾。これらは中西啓兄から直接きいた史話である。最も重要なことは、日本人医師の中で初めて検梅を行った人物は、ポンペに教えられた松本良順であるという点である。

関東における検梅は、横須賀におけるポール・A・L・サヴァティエ(仏国海軍々医)の検梅が最も早く、半年ほどおくれで慶応4年4月12日、英国海軍々医G・B・ニュートンが横浜吉原遊廓で検梅をはじめた。仏英の海軍々医が始めた港街での検梅であったから日本人医師は参加できなかった。その頃の心ある蘭方医は、牛痘種痘に続く新しい予防事業である検梅への参加で新時代に大きく貢献できると考えていた。ただチャンスがなかっただけである。ニュートンの初弟子となった松山不苦庵は、前橋藩(東)松山陣屋附の医師(十三人扶持)であったが、藩主松平大和守の命で東征軍に出向を命ぜられ、横浜軍陣病院に配属となり間もなくニュートンの下に配された^{25) 26)}。この幸運は例外中の例外であった。

その3. 変革への予兆

明治維新前後に吉原遊廓町に何か変化はなかったか、あればそれがどのような変革につながったか。変化があれば、遊廓自身の変革への内圧として重視すべきである。この点については今日まで全く考慮されていない。

a) 遊女揚げ代の表示方式の変化など

慶応4年2月発行の玉屋山三郎板『吉原細見記』をみると、遊女の価格づけは、最高級が新造附で昼夜居続けで金2両となっている。そして他はすべて銀何匁の表示に変化した。即ち、西日本の出身の兵士、小役人に向けてのサービス、言いかえると東征軍がいつ来ても価格に迷うことはありま

せんということである(西日本の取引は銀決済である)²⁷⁾。

さらに天皇東遷の後、調子にのってその年の12月、築地居留地隣に「新島原遊廓」を建設したが、居留地に外国人が集らず大失敗。加えて明治4年5月に吉原大火があり、新島原を廃止し再建吉原に吸収するに至った²⁸⁾。

b) 屋内照明の変化

世のなかが変わっていくとみて、ローソクを止めランプ燈火への転換が明治4年初めごろより流行となった。明治4年11月23日付の「新吉原規定申合」では、半年前の廓大火(表2)を教訓として、石油ランプの取扱い未熟による失火の多発を警告している²⁹⁾。しかし、明治8年末までの4ケ年間に、さらに大火が2回発生し廓内の経営は失速した。5年間に3回の大火である³⁰⁾。鎮火しても明治6年以降は仮営業所の設営の話も出せなかった。結局、座敷を娼妓に貸し、客との個人取引を建前とする業態に至る。

c) 廓内の音曲軽業芸人らの洋行

幕府開成所の洋学者たちの回覧雑誌『新聞叢叢』によれば³¹⁾、慶応2年(1866)8月末日付の記事として、江戸新吉原町江戸町2丁目在住の定吉他18人が米国へ、浅草田原町3丁目在住の源水他9人が英国へ「学芸修行罷越度相願候者」としてリストアップされている。彼らは幕府外国奉行発行の旅券を持って9月24日横浜港を出帆した。庶民がはじめて日本政府発行の旅券を持って洋行したのである。これはリチャード・R・リズレーという米国の興行師が編成した軽業混成一座の渡航であった。一座の多くは明治2年(1869)2月19日に帰国している。

この洋行は吉原の住人には大事件であった。廓内の音曲軽業芸人——『吉原細見記』に名ものらぬ者たち——が、アメリカやイギリスに行って日本の諸芸を公演したのであるから、みやげ話どころか廓内にたちまち英語熱がわき上った。

d) 共慣義塾の出張所できる。

幕府開成所の洋学者たちが、Book of Instruction for Children³²⁾の翻訳を終ったばかりの頃、吉原の音曲軽業芸人らが帰国したのである。吉原の英語

表2 明治初期の新吉原における火災、法規、検梅関係抜粋

年月日	事 件	結 果	註
明治4. 5.29	伏見町の豆腐屋より出火	廓内3分の2焼失	深川仲町に仮営業所設ける
4. 9. -	小菅県千住の検梅	1ヶ年にて中断、吉原に依託	大久保適齋担当
5. 2. ?	廓内に共慣義塾出張所できる	池田・目澤両医師の随意検梅	「新聞雑誌」32号（5年2月号）
5. 6. 5	マリア・ルス号事件	人身売買禁止並に娼妓解放令でる	遊女退散による閉店続発
6. 1.11	京町2丁目より火災	京町2丁目、角町、江戸町2丁目全焼	仮営業所設けず（以後同様）
6.12.10	東京府貸座敷渡世規則布達	青楼を貸座敷として公認	5年のマリア・ルス号事件の反動
7. 6. 6	・江戸町1丁目の五勢楼で検梅、同町の佐野槌楼で検梅	半強制で発足か（町毎の日割制、大門会所修理中）	・「新聞雑誌」（7年6月16日号） ・「郵便新聞」（7年6月8日号）
8.12.12	・江戸町1丁目の佐野槌楼より出火	廓内九分通り焼失	斎藤眞一著『明治吉原細見記』1980年
9. 3. -	松井恕助、共慣義塾に入門	検梅実習へ	自筆履歴書並に大阪朝日新聞（13年1月29日号）
9. 4. ?	角町に第五警視病院建つ（3月の「娼妓梅毒検査規則」による）	強制検梅へ（重症治療は、京橋区阪本町の本署病院に送る）	コレラを含む衛生問題は、「民」から「公」、そして「官」へ（衛生警察の強化）

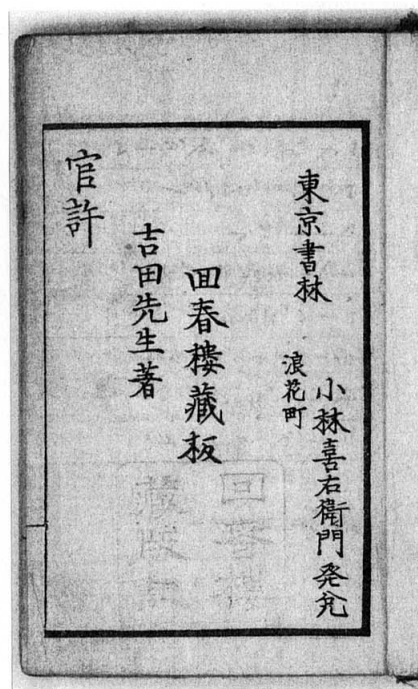
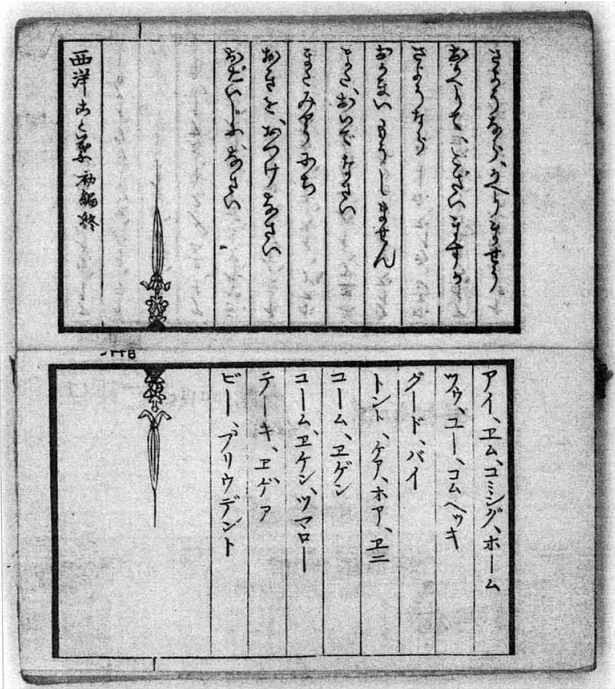


写真3 婦女児童向け『西洋ことば初編』，吉田謙輔著か

熱が日新舎塾主の福地源一郎の耳に入らぬ訳はない。彼は毎日の如く吉原に来ていたからである。会所の2階に英会話塾を開けばよいではないか、と同郷の医師池田元岱を連れて来た。池田は後に、この塾を自分が英学勉強のために在籍した共慣義塾の出張所であると、「新聞雑誌」の記者に語ったようである。異人客を視野に入れたこの会話塾は明治4年の前半期ごろの開塾と考えられる。そのころ町で使われた婦女兒童向けのテキストブックに「神原家図書記」の印が押されたものが残っている³³⁾。吉田先生著・回春楼蔵板『西洋ことば初編』明治5年、東京書林刊という超小型(7.2×11.0cm, 46丁)の本で、著者は吉田賢輔と思われる³⁴⁾(写真3)。

その4. 明治4年の急展開

慶応3年(1867)9月、英国海軍々医G・B・ニュートンは、幕府に外国船乗員のための梅毒検診制度を横浜に造らせ、初めて実施せしめた。

英国が日本で米、仏、蘭より優位にたつためには、開港場になった長崎、神戸にも同様の、制度としての検梅と駆梅を実施させ、それを英国海軍が指導することが必要³⁵⁾であるとニュートンは考えた。しかし長崎ですら彼の思うように進展しなかった³⁶⁾。そこで、明治新政府の下で、上の三港が成功する要として、首都の新吉原での制度実施こそ最大且つ緊急の課題と考えるに至った。

ニュートンは明治3年11月12日、出張先の長崎から種痘会議のため横浜に帰って来た³⁷⁾。この機会を捕えて彼は日本側の要人に向け“東京に梅毒院が必要”と口頭で働きかけた。すぐに反応があったので建言書にとりまとめ同年12月に大学東校へ提出した。この建言書は翌4年2月23日に大学より東京府へ上申の形で伝えられた。4月に入って、太政官の弁官(事務官)宛に東京府が“ニュートンがこのような事を建言しています。如何いたしますか”と伺をたてた⁴⁰⁾。太政官からの返事の内容⁴¹⁾があらかた東京府の方へ洩れ伝わっていたと思惟できる文書が神奈川県庁に残っている⁴²⁾。

ニュートンは4月23日から26日までの間、東

京府の役人と事務打合せをすませ、彼の建言書の訳文(松山不苦庵作製と伝えられる)³⁸⁾をもって、長崎へ向け26日出航した。

上述の経過については今日まで全くといって良いほど明らかにされておらず、またニュートン建言書、神奈川県庁に残った文書についてもその内容が知られていない。そこで長文ではあるが、ここに註記に加えておくこととした³⁹⁾。

註記の2文書を精読すれば、明治4年の3月中旬以降、4月26日のニュートン長崎再出張までの間に、少なくとも2回は東京府の要人とニュートンとの間で「東京梅毒(病)院」について詰めの意見交換があったことが読み取れる。(参考資料16参照)

政府は前向きに下谷竜泉寺町に病院建設用地を求めることとした。ずい分と物わりの早い決断がなされたものと感ずるが、明治3年12月の段階では、前年大阪病院の蘭医ボードウィンが性病治療の専門病院を設立して、娼妓等の検診、治療を行う必要があると大阪府に建築し、明治3年には各遊廓より出資して設立する具体策が練られている最中であった。ボードウィンの弟子であった大阪の緒方惟準はこの建築を知っており、東京府に向けての大学上申の中には“ボードウィンの建言が未実行なのは甚だ遺憾に存ずる”と述べられている。

この大学東校の上申が、直ちに側面的な援助となったかは不明であるが、政府は4月30日に、地方議会に向けて、梅毒予防の方法をとれと命じた。大阪府では明治4年10月7日より施業所(後に駆梅院)を設け月2回の娼妓らの検梅を実施している⁴³⁾⁴⁴⁾。

政府は大阪が先行していることを知ると、ニュートンの長崎説得の成功を祈ったが、彼の長崎不在中に検梅が半強制にレベルダウンしかねない情勢と、ニュートンが横浜に居ないハンデにいらだっていた。それが明治4年4月30日の民部省沙汰(本質は命令)という形で現われた。

ところが3週後の5月24日、肝腎のニュートンが長崎で急逝し、これで方針は一変した。東京

梅毒院の設立の財源がないのを見て、松本順はこの年の7月の新吉原に検梅所設立の話をもちこみ失敗している。実は建設財源は相変わらず遊女屋もちの話であった。ニュートンの奥の手は、検梅をうけた者だけに営業許可を与えるというもので、明治3年12月、浪の平遊廓（長崎南山手の崖下、外国人下級船員向け）開設時にこの手を採用した。

英医G・B・ニュートンが明治4年(1871)5月、長崎で死去したが、その半年後に英蘭堂蔵版の『治療新法』が発刊された。挿図に色づけをしたので、印刷がおくれたが、“乾の巻”の序文(荻野大見筆)⁴⁵⁾につづいて、ニュートンの“梅毒院表”^{シメン}が掲載してある。そこには「(余ノ)論説及ヒ療術ヲ耳食シ目撃セント欲セバ、寺島陶蔵君ノ指揮ニ因テさきに造立セシメシ横浜吉原梅毒院ノ医士ニ就テ之ヲ了知スベシ」と述べている。見学実習生歓迎なのである。

ここでいうニュートンの論説とは、淋疾の非梅毒説である⁴⁶⁾。1879年のA・ナイセル教授(プレスロウ大学)による淋疾双球菌の発見よりも、9年前の学説である。伝習の中でこれを理解せしめようとする意気ごみにあふれている。外務大輔で医師、洋行2回の寺島陶蔵(後の宗則、旧名松木弘安)君の認可の下に、横浜吉原病院(ザ・ロックホスピタル)で松山不苦庵について学んでほしいというのである。

当時の横浜吉原病院のスタッフを一覧してみよう⁴⁷⁾。

政府窓口	寺島陶蔵(宗則)
院長 英医	G・B・ニュートン
院長代理	松山不苦庵
医員	早矢仕有的 宮島謙齊 浦井宗一 木下宗伯
通弁	矢野徳兵衛
介抱人	若干(患者12人につき1名)
掛定役並定役	各1名
小使と水夫	各1名 (以下略)

ここにみる院長代理には、英米軍医による資格

実地試験に合格した者をあてている。松山不苦庵の場合は明治3年9月29日に合格証を受けている⁴⁸⁾。従って明治4年前半期の横浜吉原病院は、院長代理の松山不苦庵を中心として運営されていた。この時期に小菅県の大久保適齋が短期伝習生として学んだという証言があり⁴⁹⁾、後に大久保適齋が赴任した群馬県でも伝習方式を取入れ東京吉原警視病院に医員を送っている⁵⁰⁾。共慣義塾の名をかりて英会話を吉原で教えていた医師の池田元岱も伝手を求めて横浜に伝習に赴いたと考えられる⁵¹⁾。

このような紆余曲折をへて東京市よりも先に、北隣の小菅県の方が一步早く強制的検梅を実施した(明治4年9月)。しかし、1ケ年しか続かなかった⁵²⁾。

新吉原では明治5年2月頃から娼妓梅毒の診療、治療を随意的に私的に実施するに至った。強制的ニュアンスをもつ東京府の通達にもとづく検梅は、明治7年6月16日の発行の『新聞雑誌』によれば、同年6月6日から江戸町1丁目の五勢楼で行われたとある。しかし五勢楼という青楼は、慶応4年刊の『吉原細見記』に記されていない。五勢楼が明治2年の開業だとしても、同4年の廓内の大火で焼失している。

明治5年には、歌川芳虎画の「新吉原江戸町一丁目五勢楼宝槌楼合併青楼五階之真図」(写真4)が世に出た⁵³⁾。図の如くモダンな欧風窓をとりつけ、中央5階は教会様ドーム型となって再建された。見物人が押しかける姿がある。この時期はインフレ進行期である他に、復旧には東京市の指導で仲の町(中央通り)の拡張等もあり、単独資金では再建はむつかしく、合併青楼を造り内部に随意検梅の部屋を用意し、新建築に文明開化の企画(検梅)を加え口頭で宣伝したものと考えられる。

“火事は江戸の華”とは申せ、新吉原の火事は激しく、町一劃はおろか廓内三分の二に及ぶような大火が、明治初期にしばしばあった(表2)。燈油ランプの大流行が失火の原因であり、3年後の27回目の大火(明治6年1月)によって上の合併青楼は焼失した。再建までの資金ぐりも不十

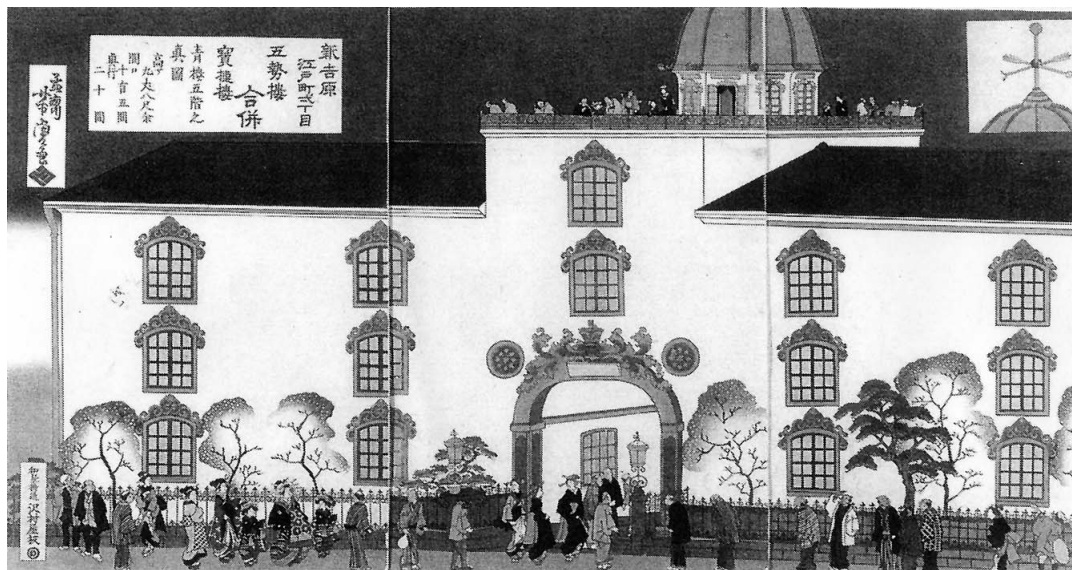


写真4 歌川芳虎「新吉原江戸町一丁目五勢楼宝槌楼合併青楼五階之真図」

分で、新吉原全体が仮営業所を外に設けられなかったほどであった。

新吉原の再建はマリア・ルス事件もからまり意外に手間取り、明治7年6月初旬でも大門口妓院会所（現在の交番のある場所）の工事は終了せず、町毎の日割制の強制検梅は、江戸町1丁目の五勢楼と同町の佐野槌（以前は一時宝槌楼と名のつた）で行った⁵⁴⁾。毎月6日は江戸町1丁目、120名の実施で、7日は同2丁目と角町、8日は揚屋町と京町であったから、検梅所1楼で1日約60名の検査が行われた。

明治8年12月12日、こともあろうか江戸町1丁目の大店・佐野槌楼より28回目の出火で廊内は九分通り焼失した。もはや業者の資金では梅毒検査所も設けられず、三業会社問題も加わり⁵⁵⁾、府に申し出て角町に第五警視病院（現在でいう有床診療所の規模に当る）の建設にいたった。

警視病院は⁵⁶⁾、東京府の各大区（現在の区に相当する地域）毎に、明治7年より日本橋阪本町、芝愛宕下、本郷真砂町、浅草橋福井町など順次建てられた。この中に新吉原を組みこんだわけである。そして、明治22年に至って廊の水道尻（うら門に当る）の外に出て⁵⁷⁾、府立吉原病院と新吉原娼妓検査所兼取締所に分けて建てられたのであ

る⁵⁸⁾。以上の如く、「民」からはじめられた検梅も、廊内の経済問題並びに外からの行政強化によって否応なく「官」の制度へと移行したのである。

その5. 名ごりの人々

池田玄泰；本稿「(その2) 塾に出入りした人物」の中で、池田元岱という医師を紹介した。しかし明治7、8年頃から池田元岱の名が文献上見当らなくなっているのに反し、池田玄泰が登場してくる。明治8年4月11日に松山棟庵、高木兼寛らが中心となって「東京医学会社」が設立された⁵⁹⁾。今日でいう学会であるが、“専ラ医風ヲ改良シテ學術ヲ講究スルニ在リ”という目的をかかげており、『医学雑誌』を刊行している。その第4号に社員姓名簿がのっており、池田玄泰は“東京愛宕下田村町8番地”となっている。また横井寛編『内務省免許全国医師薬舗産婆一覧』⁶⁰⁾（明治15年）で池田玄泰をさがしてみると、彼の免状番号は1655番で、本籍は長崎県と記されている。科目は内外科で奉職履歴により明治12年3月頃に免状を下付されている。また工藤鉄男編『日本東京医事通覧』⁶¹⁾（明治34年）によれば彼は天保7年9月生れという。福沢諭吉の2歳年下である。この時代の人は如何なる理由か、医師資格を有していても

The table is a complex grid of text. The top row has major section headers: '漢醫' (Chinese Medicine) on the left and '西洋家' (Western Medicine) on the right. Below these, there are numerous columns of smaller text, likely representing individual practitioners, their names, and their locations or specialties. The table is densely packed with characters, typical of a traditional Japanese directory.

写真5 東京銘医大見立表大家一覽 (明治16年)

右表 (西洋家) の左3段目, 3番目に「東松下丁; 目澤政常」同9番目に「田村丁; 池田玄泰」。左表 (漢医) の左3段目, 3番目に「芝田村丁; 池田玄泰」と記されている。

登録申請を急がない医師が時々みうけられる。池田玄泰も、目澤政常 (融徳?) も、松井恕助も申請を急がないグループに入っている。ここに注目すべき資料がある。「明治16年10月10日御届」 「東京銘医大見立表 大家一覽」⁶²⁾ である (写真5)。この番附表は2表あって、右表は西洋医家、左表は漢方医家となっている。なんと池田玄泰は両方に収載されている。共に田村町住となっているから同一人物であろう。古い時代の池田元岱が明治8年に医業開業免許制の実施後に、玄泰と改名したと考えられる。

目澤融徳；新吉原で池田元岱とともに検梅に参加したこの医師はどうであろう。前出の「東京銘医大見立表 大家一覽」には、池田と同じランクに目澤政常という医師が見出される。しかし『内務省免許全国医師薬舗産婆一覽』には融徳も政常も

記載されていない。せっきく改名したのに明治15年以前には内務省から免状が届かなかったか、未申請のまま死去というケースも考えられる。**松井恕助**；この人物に関する中野操の情報と、大正14年の『日本医籍録第一版』の記述とでは共慣義塾の入門動機が不鮮明である。そこで東京都公文書館が所蔵する明治12年の「医術開業試験」の簿冊を探索したところ、書類の中から松井恕助の自筆履歴書を発見した⁶³⁾。

「履歴書

東京府本郷区駒込西片町九番地

神原精二方寄留

広島県下御調郡尾道十四日町二千五番地

士族 松井恕助

明治七年四月一日ヨリ同八年二月迄テ大阪府平



写真6 大日本東京全図(明治11年・本郷区)

右から順に駒込西片町の地番が並ぶ。アミカケで示した箇所には、9番地141等214坪06, 10番地164等2920坪88と記載されている。

野町二丁目松村矩明ニ随ヒ理化学解剖外科ノ
三課実地相学ビ

明治八年四月十六日東京府下本郷元町一丁目済
生舎へ入門致シ生理薬剂病理内科ノ学課ヲ研
究仕リ爾後

明治九年三月駒込西片町九番地共慣義塾ニ入り
英普通学相脩メ当今而同塾ニテ専ラ医学勉励
仕候也

右之通相違無御座候

明治十一年四月一日

右 松井恕助

この履歴書の日付は明治12年の誤記かもしれないが、この文書を突破口として研究をすすめた。

まず、松井恕助の住所は駒込西片町9番地神原精二方寄留になっている。校主神原の住居も9番地となっている。これを検討する必要があるので、発表者、文献名、発表年、塾地番、宅地番をならべて以下の如く書いてみた。

神原精二	A. 明治11.	—	9番
松井恕助	B. // 12.	9番	9番
神原伊三郎	C. // 16.	10番	—

[文献Aは『東京の英学』附表III-7, Bは松井の自筆履歴書, Cは「共慣義塾の研究序説(下)」]

即ち、松井は塾地番と神原宅地番とが地続きのためか誤記している。塾は10番であろう。

いわゆる駒込西片町(時に本郷西片町とも云った)の9番地、10番地は、もと阿部伊勢守正弘(福山藩)の中邸。南北に細長い不整形の土地で、その跡地には田口卯吉、高山樗牛、夏目漱石、二葉亭四迷らが住んだことがある。貸家であろうと思われる。

明治11年に郡区町村編成法が定められ、東京府には15区6郡がおかれた。この年(1878)内務省地理局がはじめて「実測東京全図」を作製した。その基本となった二千四百分の一の地図のうち、本郷西片町の地図が残っている(写真6)⁶⁴⁾。

これを見ると、西片9番地は旧白山通に面している。15年前は中山道であって、にぎやかな通

りであったという。

蛇足であるが、この9番地は214坪余あり、明治34年11月以降、富士川游が通り奥の122坪を買入れている(9番の2と表示)。同42年2月16日、游の四男英郎はここで生れている(参考資料10)。

つまり、この西片町9番地に神原精二が居住し、10番地に共慣義塾出張所(分塾)があったといえる。共慣義塾、西片町、富士川游のつながりを、中野操が知らないとは思議に感ずる。関東大震災後の文献情報の混乱にまどわされたのかも知れない。

最後に松井恕助の経歴であるが、出身は広島県である。森立之や本研究に登場する神原精二、富士川游らは広島県関係者である点は注目に値する。松井は安政3年(1856)12月4日生で明治7年(1874)4月に大阪に出て、松村矩明(元大阪医学校校長、福井県大野出身)の啓蒙義塾に学んだ。松井が同8年4月に東京の済生学舎に入門したところ、共慣義塾で本当の臨床を教えようと聞き、湯島三組町105番地(元松平久松別邸)⁶⁵の共慣義塾を訪れた。そこには松村矩明の友人・中泉正がいた。彼らは英学に長じJ. LeidyのElementary Treatise of Human Anatomy 1861の本文を訳し『解剖訓蒙』とし、H. Grayの解剖図(1870)を集成し『虞列伊氏解剖訓蒙図』と名づけ共に明治5年に刊行している。明治8年の中泉正の住所は、「東京医学会社・社員姓名簿」によれば⁶⁶、湯島三組町105番地である。即ち、中泉は軍医だが共慣義塾の中に住んでいた。かかる縁で松井は済生学舎の方は1年でやめ共慣義塾に転入した。

芝新銭座時代の慶応義塾では塾生が300余名となり、寄宿生の病人のため塾舎内に養生所(医務部)をおき塾生で医師であるものに診療させた⁶⁷。共慣の中泉、池田らも、松山棟庵の影響(みな東京医学会社員)をうけ塾内で生徒の健康管理や診療にたずさわっていた。

そういう環境の外、他塾にない性病診療を松井は新吉原で学習、技術伝習したと思われる。その臨床実習は1週間で入門編が終ったようで、新吉原角町の第五警視病院で、のちに検梅医となった池田玄泰の指導をうけたと考えられ、松井は昇永

水の注射薬の製法まで学ぶのに3ヶ年を要したといえる。

明治13年1月に業を終え故郷の尾道にもどり、父親の勤める備後尾道駆梅院で父圭蔵の癒せなかった娼妓の梅毒を、昇永水の皮下注射で治癒せしめた。大事件とばかり1月29日の大阪朝日新聞のスクープ記事となった。

私どものその後の調査では、松井恕助は東京府の医術開業試験(明治12年8月施行の「医師試験規則」以前の「旧試験」で明治12年7月12日実施、11月15日合否判定)には残念ながら不合格であった。父の代の医業業績も認められ「従来開業医師」のランクで認可(免許2608号、明治17年申請)され、故郷尾道で開業したのである。

まとめと結び

本稿のはじめに、1. 盛岡藩士神原精二の経歴並びに彼と共慣義塾との関係、2. 共慣義塾とそこに出入りした人物、中でも神原伊三郎、池田元岱の解明、3. 東京検梅史上における明治4年以降の急展開(「民」から「官」への急展開に、吉原遊廓のなかで何が作用したのか)、4. 共慣義塾内での医学教育の解明にキーマンと考えられる松井恕助の探究。この4点を共慣義塾研究に残された大きな課題としてあげた。そして私どもは新資料を収集して次の成果をえた。

1. 神原精二という学僧は、浄土宗の京都知恩教院、芝増上寺に学び、後者の学寮長を務めるかたわら天台宗の上野寛永寺でも学んでおり、江戸で計6ヶ年励んだ。勤皇僧として孝明天皇の主張する「佐幕攘夷」派で活動したが、維新後(明治3年)に還俗した。直ちに盛岡(南部)藩士族に迎えられ、藩財政の整理に手腕を発揮した。その一連の活動の中で南部郁子(徳川慶喜の姪)と元知恩院宮尊秀親王(明治2年に勅命還俗して伏見宮博経親王となる)との結婚を成立させている。そして明治9年に、湯島三組町の英学塾・共慣義塾の開学願人となった。その後、仏教再興運動に取組み、福島県の岩代安積地方の開墾事業をおこし、明治18年1月に死去した。まさに波瀾万丈の一生であった。墓は谷中天王寺墓地にある。

2. 英学塾・共慣義塾は、明治4年12月に盛岡藩七戸分家の隠居・南部信民を開設者として開学届をだし、翌月京橋木挽町に塾舎を建て開校した。しかし3ヶ月後に塾は火災で焼失した。そこで5年の6月、本郷湯島三組町の福地英学塾(日新舎)を買取り、地所は借地とし共慣義塾を移転した。

同9年5月13日、本郷の共慣義塾の開学願人が神原精二に変わる。同11年10月に駒込西片町9~10番地に義塾の出張所を開き、後に本事務所をおく(届出人は神原精二)。この地所の所有者は、神原のかつての得度地・備後福山の元城主阿部家である。だが同16年9月25日付で共慣義塾は廃校となった。(届出人は「校主」神原精二、代理人神原伊三郎、である。)

神原伊三郎は、精二の養子であって、良く養父の手助けをし、後に大蔵省から英国へ留学し、鉄道管理の専門家となって帰国した。

池田元岱は長崎出身の医師。旧幕時代は漢方医学、維新前後は蘭方医学を修め、明治8年以降、玄泰と改めたらしい。芝田村町に住み、共慣義塾に入って英学を学び、早矢仕有的、松山棟庵、荻野大見、中泉正らと共に東京医学会社の社員となった。共慣義塾の木挽町塾舎が火災焼失したあと、明治5年1~2月頃に福地源一郎の口ききで吉原遊廓内に共慣義塾出張所(名義借りの英会話塾と考えられる)をつくり、目澤融徳をさそって娼妓の随意的な検梅と治療をはじめに至る。

3. 慶応2年8月、吉原遊廓内の音曲軽業芸人らが米国興行師に雇われ、米英諸国で公演し、明治2年2月に帰国した。これにより廓内に英語熱がわき上り、顔ききの福地源一郎(桜痴)らの口ききで共慣義塾出張所ができ、英会話を池田元岱が教えた。その時期は明治4年の春以降の頃と考えられる。

4. 明治維新の戦いで東征軍が江戸に入る前(慶応4年2月)、吉原遊廓では遊女の揚げ代を銀価格で表示した。東征軍の受入れのためである。また同年12月には新たにできた築地居留地の隣に「新島原遊廓」を建設した。世の中の変化にともない、吉原でも明治4年初め頃より屋内照明を

ローソクからランプ燈火へ転換した。これにより石油の取扱い不なれにもとづく失火が多発し、明治4年初めから8年末までの満5年間に3回の大火が発生した。つまり東征軍が来ても景気は上らず、「新島原遊廓」へ外国人は集らず、その上の度重なる大火によって、吉原遊廓の経営者は大赤字の連続となった。廓再建の手段として、青楼建築を欧風にすること、きれいな体の妓婦であることを経営者に選択PRさせたと考えられる。しかし、廓内に妓院会所、芸者見番、茶屋会所を一体化し、会社形態にして運営しようとする者もあらわれ(明治8年4月)、行政をまきこんだ訴訟沙汰となった。その結果、「権力をもって民業に干渉をなす」者として会社派はやぶれた。その当時、街々に私娼が増え、性病罹患者が続出多発したので、警視局や東京府は市内に次々に建築していた警視病院を、吉原遊廓内にも建て強制検梅に至ったのである。(明治9年4月頃、角町に第五警視病院建つ)

即ち、吉原に代表される東京市内の遊廓における検梅は、まず「民」からはじまったが、発足間もなく経営資金不足の課題を次々と抱えこみ、結局、当局側の強制検梅をのんで検梅所を兼ねる警視病院の建設を受入れなければならなかったのである。因みに、吉原遊廓が経営的に盛り上っていったのは、明治10年の西南戦争以後であった。

5. 共慣義塾と医学との関連をうかがわせる文書に、塾生であった松井恕助の履歴書がある。松井恕助は東京に出る以前、大阪で英米学派の松村矩明が開いた啓蒙義塾で医学一般を学び、上京後(明治9~12年)は済生学舎で医学、共慣義塾で英学と医学を学んだという。当初は三組町の塾に仮住いしていた松村の盟友・中泉正や教員クラスの池田元岱(玄泰)に個別の医学医術の指導を受けたものと思われる。というのも、手塚龍磨の『東京の英学』のなかの共慣義塾教員の項や、私塾開設年月等調をみても、どこにも医学という科目は見当たらない。即ち、検梅駆梅の実習を含む個別指導を池田らに受けたにちがいない。しかし4ケ年も学んだのに、余りに偏寄りすぎたため、不幸にも明治12年の開業医試験に合格しなかった。

はじめから非ドイツ流というハンデを彼は背おっていたためであろう。

結び；昭和10年，中野操は「我邦に於ける皮下注射特に水銀皮下注射の濫觴に就て」という論文を発表した。この中で重要な事項が2点存在する。ひとつは明治5年2月頃から東京吉原遊廓内の共慣義塾出張所の医士・池田元岱らが業者の意にそって随意的検梅，駆梅を行ったこと，もうひとつは共慣義塾で医学を修めた松井恕助が，故郷の尾道で娼妓の長びく梅毒を水銀皮下注射でたちまち治癒せしめたことである。しかし中野は，上の史実を検梅史や駆梅史の中に，強く押しこもうとしなかった。それは，中野が関東大震災後の資料収集は困難とみて，共慣義塾の研究を放棄したからである。

私どもは視点をかえて資料を新しく集め直し，共慣義塾と医学医術の関係を検討し，必ずしも決定的とは言えぬ結果しか得られなかったが，中野の残した部分を補充し，東京検梅史の補遺とするには十分な成果をあげることができた。（了）

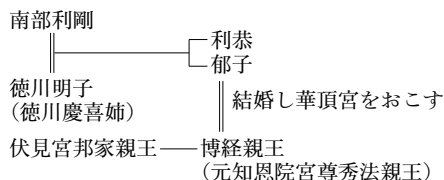
文献ならびに註

- 1) 中西淳朗. 共慣義塾の研究序説. 日本医事新報 2005年11月19日; No.4256: 48-50. 2005年11月26日; No.4259: 63-64
- 2) 中野操. 我邦に於ける皮下注射特に水銀皮下注射の濫觴に就て. 治療及処方 昭和10年7月11日; 第185号: 137-148
- 3) 佐藤竜一. 盛岡藩(シリーズ藩物語). 東京: 現代書館; 2006. p.191-196
- 4) 大植四郎編. 明治過去帳〈物故人名辞典〉. 東京: 東京美術; 1971年新訂初版. p.199
- 5) 吉田光覚. 神原精二居士の生涯. 仏教論叢 1983; 第27号: 17-24
- 6) 柳田泉. 福地桜痴(吉川弘文館人物叢書129). 東京: 吉川弘文館; 1965. p.134-135
- 7) 大平和典. 特集天皇家と宮家(近世から近代の11宮家の歴史と系譜) 歴史読本 2006: 807号. p.134, 152, 172
- 8) 吉田祐倫. 勤皇僧・神原精二伝. 仏教論叢 2006; 第50号: 314-320
- 9) 南部利恭の母は水戸の徳川斉昭の六女松姫明子で，明子の母は一条登美宮吉子=有栖川宮織仁親王の末娘である。誇張すれば，利恭には有栖川宮家の血が

入っていると云える。系図式に表示すると次の如くなる。

(第6代) 有栖川織仁親王宮——(末娘) 登美宮吉子
 ——一条家をへて水戸徳川家に嫁ぐ
 (斉昭六女) 徳川明子——南部利恭
 南部家に嫁ぐ

10) 明治初期における南部家の血縁



- 11) 瀬戸内海沿岸では神原はカムバラと読む。精二の孫はKANBARAと書いている。
- 12) 手塚龍磨. 東京の英学. 東京都都政史料館; 昭和34年. 229頁に，明治6年の移転による開学願が掲載されている。その学校位置は“湯島天神下三組町新五番地 福地源一郎より借地”となっている。
- 13) 家臣人名事典編纂委員会. 三百藩家臣人名事典. 東京: 新人物往来社; 1987. p.198-199
- 14) 神原泰. 生い立ちと大正期新興美術運動を語る(「大正新興美術の息吹・アクション展」図録). 東京: 朝日新聞社; 1989. p.5
- 15) 前掲文献12) 付表「III 明治初期東京在住英学私塾関係外人教師一覧」
- 16) 明治文化全集第8巻風俗編. 東京: 日本評論新社; 1955年改版. p.408
- 17) 前掲文献2) 参照
- 18) 市川伊三郎. 新吉原遊廓略史(非売品). 東京: 新吉原三業組合発行; 昭和11年. p.24-27
- 19) 小川鼎三・酒井シヅ校注. 松本順自伝・長与専斎自伝(東洋文庫386). 東京: 平凡社; 1980. p.24-27. 松本良順曰く「万延元年，計らずも梅毒検査法を行うことを得たり。(中略)これが我が国にて駆梅の創始なり。」当時の蘭方医は検梅が駆梅の第一歩と認識していた。従ってかつてない検査を初めて行ったことの誇りを高々と語った。
- 20) この説が真なれば，福地の若き頃の遊蕩を十分に説明できる。(安田克広編. 写真が語る幕末維新. 東京: 明石書店; 1997. p.35)
- 21) 関寛斎. 萬延元庚申十二月より文久二辛二月迄「長崎在学日記」p.3-4. ——関寛斎の原本(関静吉氏所蔵)を北海道陸別市が作製したコピー本による——。
- 22) 中西啓. 長崎外科史. 第17回日本消化器外科学会総会記念出版(非売品); 1981年. 中西啓(あきら)は中西淳朗とは血縁はない。淳朗が永らく兄事した医史学者である。
- 23) 前掲文献19) 参照

- 24) 古賀十二郎. 西洋医術伝来史. 東京: 形成社; 昭和47年復刻版.
- 25) 松山陣屋研究会編. 前橋藩松山陣屋. 埼玉県: 松山陣屋研究会; 1989.
- 26) 大久保利謙編. 明治初年医史料・続(中外医事新報別冊). 日本医史学雑誌17巻. 京都: 思文閣出版; 1983年復刻版.
- 27) 金1両=銀50匁(慶長14年)であったが, 幕末には銀60匁以上の相場となった. 大店の上級が新造抜きで銀96匁(金1.5両に当る).
- 28) 東京都公文書館編. (都史紀要四) 築地居留地. 昭和32年初版. p. 122-128
- 29) 東京都編. 東京市史稿市街篇第52, 昭和37年. p. 488-491
- 30) 斎藤眞一著. 明治吉原細見記. 東京: 河出書房新社; 1985年. p. 105
- 31) 明治文化研究会刊. 幕末秘史新聞叢叢. 昭和9年. 東京: 岩波書店; 1995年復刊. p. 253
- 32) 三原文. a) 軽業師の倫敦興行. 芸能史研究110号. 京都: 芸能史研究会; 1990年. p. 44. b) 米国興行に賭けた芸能六座の動向. 同誌127号. 1994年. p. 1-23.
三原によると米国組の旅券は第1~18号であった. 英国組の源水の旅券番号は不明. また『歯科沿革史調査資料』(1926年刊, p. 91-92)によれば, 松井源水は曲独楽と歯磨売を業とし, 帰国後は入歯師を専業にしたという.
- 33) 片桐一男. 日本英学資料総合目録, 青山学院大学総合研究所・人文学系研究センター, 研究叢書第4号「外国文化の定着過程と言語」(1994年刊, p. 196-197)によると, この原本の著者は不明だが九州大学に2冊あるという.
- 34) 中西の私蔵書. この本は上記の片桐の目録には収載されていない.
- 35) 幕府開成所の元筆記方出役取締で, 「新聞叢叢」の編集者のひとりという. 維新後は慶応義塾の教授, 尺振八の共立学舎の教授をつとめ, 明治5年に大蔵省に出仕し洋書の翻訳をした. (日蘭学会編. 洋学史事典, 雄松堂書店刊. 昭和59年刊. より)
- 36) 山本俊一. 売春性病史. 東京: 文光堂; 2002. p. 22.
- 37) 古賀十二郎. 西洋医術伝来史. 東京: 形成社復刻版; 昭和42年. p. 399-402
- 38) 深瀬泰旦. 幕末, 明治初期の感染症対策——ジョージ・B・ニュートンの二大事業——. 三杉和章編. 横浜と医学の歴史. 横浜市立大学一般教育委員会; 1977年6月. p. 55-57
- 39) 太政類典草稿. 慶応三年至明治四年七月「保民衛生」——明治3年12月, 31項——東京府下ニ梅毒院ヲ建設セン事ヲ請フ, 大学上申, 3年12月, 弁官宛(国立公文書館蔵)
- ゴザンニュートン建言(大学東校宛)
夫レ梅毒ハ陸軍ト海軍トヲ衰弊セシム, 且ツ其男

女ヲ犯スニ由テハ間々生ズル所ノ小兒強壯ナルコト能ハズ, 皆衰弱ニシテ腺病質ヲ受テ国ノ勢威ニ由テ逡巡セズンバ非ズ.

古昔ヨリ国家ニ長タルノ人, 医業ヲ業トセル者ト共ニ此悪疾ヲ防ギテ其猖獗^{トド}過メザルコトヲ知リ, 頗ル肝要ノ事タルヲ知レリ. 故ニ1867年仏国^{パリス}巴勒ニ於テ国政ヲ會議スルコトアリシニ, 此防梅ノ法講ジテ以テ諸国ノ政府ト共ニ此法ヲ行フコトヲ約セリ. 即チ都テ遊女娼妓ノ類ハ一週日間ニ二次若クハ一次時ヲ定メテ之ヲ検査シ, 若シ疾アル者ハ預設セル所ノ病院ニ入レテ其癒ル迄ハ留メ置テ之ヲ治療スルノ法タリ.

貴君等既ニ医職ニ在レバ貴国ノ士民患フ所ノ梅毒其力ノ猖獗ナルコトハ既ニ予言ヲ待タザルベシ. 其娼妓ヲ検査シ病院ヲ備フルノ法ヲ東京ニ行フトモ既ニ他所ニ於テ歴驗セシ式ニ由レバ, 食餌薬剤衣服床蓐ヨリ諸品ノ修繕看備者庖人等ノ給料等一切ノ費用妓一人ニ付錢2貫2百文ニ過ザルベシ. 香港ニ於テハ病人各22セントニテ1日施療ヲ受ケタリ.

病ヲ治スルハ医ノ本分ニシテ之ヲ防グハ其大標タレバ, 予苟モ上件ノ事ヲ諸君ニ忠告ス. 東京ニ於テ梅毒院ヲ建テ娼妓ヲ検スルノ法ヲ興サバ予亦諸君ヲ補翼シテ尽力スベシ. 不宣

1871年3月17日 於横浜

[濁点, 句読点は著者ら記入]

○梅毒院取建一件ニ付英国領事へ書簡

以手紙致啓上候, 然バ過日御面晤ノ節云々御相談オヨビ置候梅毒〔病〕院取建ノ一条, 粗支度モ整候間来ル22日3字頃マデニ運上所ニテニュートン氏へ御打合オヨビ, 尚実地ノ模様御相談申度候間, 其段貴下ヨリ同氏へ御通達被下度存候. 此段可得御意斯御座候以上.

辛未4月20日

東京府権大参事 平岡通義
東京府大参事 北島秀朝

英国副領事

ジョン・シーホル 貴下

[濁点, 句読点は著者ら記入. この文書の出典は, 文献42)による]

- 39) 上記史料中に, 明治4年2月23日の太政官弁官への大学から伺文書があり「去冬(立春以前), 英医ニュートンと申者より梅毒院の儀に付, 別紙の通り建言いたし候」と記されている. [カッコ内は著者挿入]
- 40) これで正式な文書となるので, 建言書は3月に入って書き直しされたものと考えられる. (日付だけの手直しか?)
- 41) 上記38)の最後に, 弁官を通じて東京府の伺に對する返書の内容「伺の通」が収載されている. 明治4年4月22日付. よきにはからえてある.
- 42) 『神奈川県史料第6巻』——交際(明治4年の部). p. 282

- 43) 民部省沙汰・娼妓梅毒検査方，明治4年4月30日一文献44)のp.27
- 44) 須田菊二著．松島遊廓沿革誌．大阪：松島貸座敷業組合事務所；昭和8年（非売品）．p.25-29
- 45) 小川鼎三・酒井シヅ校注．松本順自伝・長与専斎自伝．東京：平凡社；1980年．p.42-45
- 46) 日蘭学会編．洋学史事典．東京：雄松堂出版；昭和59年．p.554（長門谷洋治担当）
- 47) 今井忠宗編．我国検梅駆梅の端緒．千葉医専雑誌，1915；第72・73号合併号，p.307-310
- 48) 「ニュートン代診試験合格証の写し」横浜市史料編第20，任免報告類一7-第7条
- 49) 河瀬秀治談話．東京市史稿市街篇第52（昭和37年）．p.267，大久保某と記されている．
- 50) 丸山清康著．群馬の歴史．群馬県医師会；1958年：p.334
- 51) 後に，池田玄泰とともに東京医学会社社員となる．二人は芝愛宕下の住人．
- 52) 県令の河瀬秀治は，性悪説派で売春禁止支持者．大久保適斎の必要悪説とは常々衝突したと考えられる．その上，娼妓の課税問題がからんだ．共に1年後，転勤となる．
- 53) 歌川国芳の弟子（初代豊国の孫弟子に当る）．風俗画，横浜錦絵の作品が多い．
- 54) 永光銀之助．日本に於ける検梅の始まりに就いて，日医雑誌 36巻1号；昭和31年．p.33-37
- 55) 警視庁史（明治篇）．昭和34年．p.98-106．非売品
- 56) 厚生省医務局編．医制百年史（記述篇並びに資料篇）．東京：ぎょうせい；昭和51年．p.129
- 57) 他の警視病院は財政問題等により，明治14年3月28日廃止されたが，吉原は検梅を軸にして存続した．
- 58) 中村芝鶴著『遊廓の世界』の表紙扉収載の「明治時代の新吉原」図によれば，第五警視病院の跡は“茶屋会所”になっている．茶屋とは，出前による飲食中心，青楼からの迎えの来るまでの時間に遊興させる古い業態（引手茶屋）で，次第に消滅した．この飲食費用が誠に高値（市中の倍額）であったらしい．
- 59) 東京慈恵会医科大学百年史．昭和55年．
- 60) 横井寛編．内務省免許全国医師業産婆一覧．国会図書館では，明治15年6月に刊行された同書および追録版2号（15年11月），追録版4号（17年7月）を所蔵している．
- 61) 工藤鉄男編．日本東京医事通覧．明治34年．同書は国会図書館の近代デジタルライブラリー＝<http://kindai.ndl.go.jp/>で閲覧可能．なお著者のひとりである樋口は，第100回日本医史学会総会で前掲「内務省免許医師……」の，第109回同学会総会で「日本東京医事通覧」に掲載されている医師の名簿を作製した．
- 62) 「東京銘医大見立表大家一覧」では，東京府内の高名な医師たちを相撲番付に見立て，洋医と漢医にわけて掲出した．著者らは木版刷りの原本は実見して

いないが，深川震堂『漢洋医学闘争史——政治闘争篇——』，今田見信『小幡英之助先生』などに図版が影印されている．

- 63) 東京都公文書館所蔵．明治12年回議録第5類「医学試験ノ部」（衛生課）に編綴．同館での簿冊コードは“610.C5.2”
- 64) 西川光通編輯．大日本改正東京全図（本郷区，十五葉内十一号）．明治11年5月9日版権免許．
- 65) 「溝口讚岐守 下邸跡」という人もあるが，それは誤伝．参考資料12)を見よ．
- 66) 東京医学会社．医学雑誌，第4号，明治8年8月，p.33-38（社員姓名簿）．本論に出てくる池田玄泰，早矢仕有的，松山棟庵，荻野大見等と共に英学仲間である．なお『医学雑誌』第54号（明治13年5月）の社員姓名欄には，「池田玄泰；勢州松坂町病院」「日澤政常；東京神田区東松山下町21番地」と記載されている．
- 67) 参考資料9)を見よ．参考資料7)の『図説・慶応義塾百年小史』では改築図に養生所が読み取れる．

参考資料

- 1) 手塚龍磨．東京の英学．東京都政史料館；昭和34年．
- 2) 台東叢書・新吉原史稿．東京都台東区役所；昭和35年．
- 3) 中村芝鶴．遊廓の世界．東京：評論社；昭和51年．
- 4) 横瀬夜雨．史料・維新の逸話（太政官時代）．東京：人物往来社復刻；昭和43年．
- 5) 加藤政洋．花街，異空間の都市史．東京：朝日新聞社；2005年．
- 6) 太丸伸章編．お江戸の歩き方．東京：学研；2002年．
- 7) 図説・慶応義塾百年小史（非売品）；1958年．
- 8) 写真集・慶応義塾150年．慶応出版会；2008年．
- 9) 慶応義塾編．慶応義塾史事典；2008年．
- 10) 「ポエチカ」第3号，1992年，小沢書店月報（富士川英郎特集号）
- 11) 中西淳朗．横浜における梅毒とその治療史（1～5）．皮膚病診療 2000；22（1-5）．協和企画社．
- 12) 中西淳朗．新撰・東京検梅史．皮膚病診療 2005；27（10-12）．協和企画社．
- 13) 中西淳朗．知られざるポリスの病院史，神奈川県保険医新聞，2009年4月5日号より8回の連載，神奈川県保険医協会発行．
- 14) 中西淳朗．吉原店者の留学願書．診療研究 2006；417号．東京保険医協会発行．
- 15) 安井昌孝．大阪における検徴．日本医事新報 2000年8月26日；No.3983
- 16) 鈴木健夫他．ヨーロッパ人の見た幕末使節団（講談社学術文庫）．東京：講談社；2008年．この著書の中（181頁）に，使節団付添医師・松木弘安，高島祐

啓、川崎道民らは、ベルリンで風紀警察医長のベレント博士から公娼の監視、性病予防並びにその対策について、必要な解説と説明を英語でうけたとい

う。1862 (文久2) 年のことである。——実習はなし? ——従って松木 (寺島陶蔵のこと) は、明治政府内において検梅制度をよく知っていた。

A Study of Kyokan Gijuku: A Supplement to the History of Syphilis Testing in Tokyo

Atsuo NAKANISHI¹⁾, Teruo HIGUCHI²⁾

¹⁾ Yokohama City

²⁾ The Nippon Dental University, School of Life Dentistry at Niigata

The testing and treatment of licensed prostitutes for syphilis in the Tokyo area began around February 1872 (Meiji 5) within the Yoshiwara red-light district, surprisingly enough from the request of the brothels themselves. In 1876 (Meiji 9), an ordinance for the testing of licensed prostitutes for syphilis was passed, making testing and treatment mandatory, but little research has been done on the changes this brought about within the district in the intervening period. It is this interval of time that we have undertaken to examine, making use not only of laws, ordinances, and other public documents, but also manners and customs, incidents within the district, and sources from the hygiene police, among other materials. The results of our research into the four-and-a-half-year period beginning in May 1871 (Meiji 4) lead us to surmise that, due to three disastrous conflagrations, the district hit an economic dead end, and its syphilis testing activities were swallowed up by an officialdom bent on strengthening the hygienic police. Some of the physicians at the Kyokan Gijuku showed a subjective concern with syphilis testing at the Yoshiwara in its early stages, but they never carried out systematic education on the subject within the school.

Keywords: Kyokan Gijuku, Yoshiwara red-light district, history of syphilis testing in Tokyo, hygiene police, Yoshiwara conflagrations